

グローバルな世界の中の新興国・開発途上国

やまだ ひろゆき
山田浩之

経済学部 教授

国際政治経済でプレゼンスを増している新興国や開発途上国。これらの国々の様々なテーマを、データを駆使して多面的かつ自発的に学びます。

当研究会では開発経済学という研究分野を学んでいます。開発経済学は新興国や開発途上国が直面する様々な課題を扱う研究分野で、マクロからミクロ的な諸問題まで非常に幅広いトピックを包括的に学ぶ必要があります。また、近年の開発経済学ではデータを用いた仮説の検証や開発プロジェクトのインパクト評価がほぼ必須となっているため、計量経済学的手法の学習と、それら手法を用いた論文執筆に力を入れています。開発経済学と計量経済学の両立は大変ですが、学生たちはお互い切磋琢磨しながら日々研究に励んでいます。

また開発経済学の特徴ゆえ、日本国内での座学だけではイメージが湧かず、直感的理解や知識にも限界があります。そのため、学生の強い希望がある場合には、夏休みに実際に新興国もしくは開発途上国の地を訪れ、様々な体験をし、現地企業やNGOのお話を伺う海外スタディツアーを実施しています。これまでに、ベトナム、ルワンダ、イ

ンド、ミャンマー、カンボジアなどを訪れました。またこれにより、ゼミ生同士の親睦が深められ結束が強くなるというメリットもあるようです。加えて、援助機関やフィールド経験豊富な方々をゼミにお招きして、様々なお話を聞く機会も設けています。

世界にはいまだ貧困に苦しむ国々が存在する一方、堅調な経済成長を遂げ国際政治経済の舞台で存在感が増している国々も存在します。例えば本稿執筆時点で、2025年には日本のGDPを追い抜くと言われているインドなどは、国内に様々な問題を抱えつつ国際舞台ではその存在感を増している国の典型例と言えます。このように開発経済学は激動する世界経済の中で新興国や開発途上国が台頭してきていることを俯瞰的に捉えつつ、その一方で細部に生じている現象を注視していくという、非常にダイナミックな学問領域です。ゼミでの経験を基に、世界の架け橋を担うような国際的人材が多数出てきてくれることを願う次第です。

現場の経験をデータ分析に活かす

とがわ ゆい な
外川結奈君 経済学部4年

山田浩之研究会では計量経済学を用いた開発経済学を研究領域としていて、他研究会にはない一番の魅力はスタディーツアーと呼ばれるフィールドワークです。2023年度はカンボジアのプノンペンに赴き、企業や国際機関や現地の政府管轄機関などで実際にお話を伺いました。このスタディーツアーで学んだトピックから、3年生は三田祭での発表論文の、4年生は卒論のテーマを決める学生も多くいます。訪問の経験からか研究会全体の仲も良く、自主性を重んじる先生のご指導の下、自分が学びたい内容をのびのびと研究できる環境なのもまた魅力だと思います。



社会変革を促す方法論を求めて

しんじょうあつし
神成 淳司

環境情報学部 教授

それぞれ異なる興味とテーマを持つ25名ほどの学生と特任教員・研究員が、科学技術、政策、ビジネスという3つのアプローチを用いた、社会変革手法の検討とその実践に取り組んでいます。

優れた研究成果やその技術が社会に実装される際には、その技術を受容させるための社会変革を伴うことが、よりよい社会変革へとつながることが多いです。さまざまな社会課題が山積する状況を踏まえると、特定の知識や技能に加え、よりよい社会変革を促すための方法論を習得した人材の必要性が高まっています。

本研究会では、「持続可能な食」を主題に、科学技術、政策、ビジネスの3つの柱を軸として、社会変革を促すための方法論の習得とその実践に取り組んでいます。科学技術に関しては、情報科学からのアプローチに加え、本研究室と連携協定を結ぶ、理化学研究所光子工学研究領域との協業を通して検討を進めます。ビッグデータ解析、AI、非破壊計測などを学ぶことで、科学技術の理解を深め、発展性に関する知見が得られます。政策面では、指導教員の政府や地方公共団体における情報政策立案・推進の実務経験を活かす、法的規制や知的財産保護などの課

題について理解し、検討を重ねます。

ビジネス面では、料理人やトレーナー、コンサルタントなど多様な肩書きを持つ研究室所属の特任教員・研究員の経験を活かした実践的な検討を進めます。これら3つの柱の価値を理解した上で、視点・視座・視野の3つの観点から相対的に物事を捉え、どのようにこれら柱に基づく取り組みを使い分け、あるいは組み合わせることが、よりよい社会変革を持続的に実現することにつながるかを学生ごとに検討します。研究会が提供するのはいくつかの検討の機会であり、それをどのように活用し発展させるかは学生自身の判断に委ねています。現在では、理化学研究所での研究や地方自治体での実証への取り組みを並行して実施する場合がありますし、テーマを「食」から「介護」や「スポーツ」などに変更して取り組みを深化させる場合など、学生の自主的な探究による社会変革を見据えた多様な取り組みの実践が繰り返されています。

研究成果を社会に活かす仕組みづくり

しまだ さおり

島田早織君 環境情報学部 4年

神成研究会では個々の研究を基礎研究で終わらせず、その研究成果をどのように社会で活用するのかを考えること、そして社会実装するに当たってどのように持続可能な仕組みを作るのかを明確にすることが求められます。私は「IoTデバイスを利用した高齢者のヘルスデータの共有システム」をテーマに研究していますが、その中で常に意識しているのは視点・視座・視野の3つの異なる観点に基づき問題を捉えるという神成研究会の教えです。何に課題を置いてどのような立場からどのような範囲の問題解決を図るのか。これら3点を意識することで、より的確に研究成果を社会に活かす仕組みづくりの構築を目指しています。

